

美馬 昇 学園長先生を偲んで

平成 7 年 4 月 27 日 永眠



弔 辞

校長 美馬 宏衣



本日、生光学園創立者であり、前理事長でもあった故美馬昇学園長の学園葬に際しまして、学園教職員を代表して弔辞を述べさせていただきます。ここに一言お断わりさせていただきます。と、申しますのも学園長は、尊敬する師であり上司であると同時にまた私の父でもございました。

親子でありながら弔辞を読ませて頂く関わりの複雑、僭越さに、ためらいながらも、それでもなお、関係者の方々に許し願ひ、ここに得難い機会に恵まれましたことを心から感謝申し上げます。次第でございます。

去る四月二十七日午前五時五分、美馬昇学園長は、一年にわたる闘病の甲斐な

く、逝去致しました。折しも春の終わり、全てが光に溢れ青葉若葉の輝きに満ちた、眩しすぎる季節でございます。

全ては天命でありやむを得ぬことは申せ、「もういつぱん桜を見に行こうね」と、今一度はとの希望もあつただけに、死が紛れもない現実であることを知りながらも、なお現実を超えて、そこには何か特別な時間が流れ、旅立った直後のあの静けさに満ちた学園長の顔は、神々しいような懐かし

いような非常に不思議なものでございました。残された者たちの辛さも悲しみも寂しさも、大切なものを喪う痛みも残らず許容しながら、学園長はなお学園長として、この日がそこにとどまることを決して望みはしないでであろうことを実感として受け止めぬわけにはまいりませんでした。

ひとたび眼を転じて周囲を眺めるとき、有形無形に学園長が生涯かけて残してくれた諸々はあまりに多く

悲嘆に沈む間もあらばこそでございます。

顧りみますれば、学園長は常に学園と共にあり学園の中心にありました。ほんの小さな塾からの出発、戦後すぐ開設した専門学校に集まって下さった方々とのご縁は、今日までずっと変わらずいたいております。今日、この会場にその頃から関係者の多くにご参列いただいている学園長の幸せは、ちよつと比類ないものでございましょう。

ささやかな塾の時代から教育は天職と思ひ定めていた学園長の歩みはいつとも力に溢れ、自信に充ち、決して自分と他者への信頼を失わず、その姿勢には常に教育者としての本気と覚悟がありました。

反面、生まれたまんまの無邪気を失わず唯働きに働いていたような生活の中でその言動はのびのびと自由でした。丁度今頃の季節になりますと朝昼晩と信じ難いような過酷な三交代の授業を連日こなしていた学園長が夜間部の授業を終えて帰って来る夜の向こうに、しきりに鳴きしきっていた蛙の声をなぜか強く思い出したり致します。死の直後には覚

えなかつた喪失感がおそいかかり、懐かしいものがごちやまぜになつてわけもなくふいに涙が流れます。

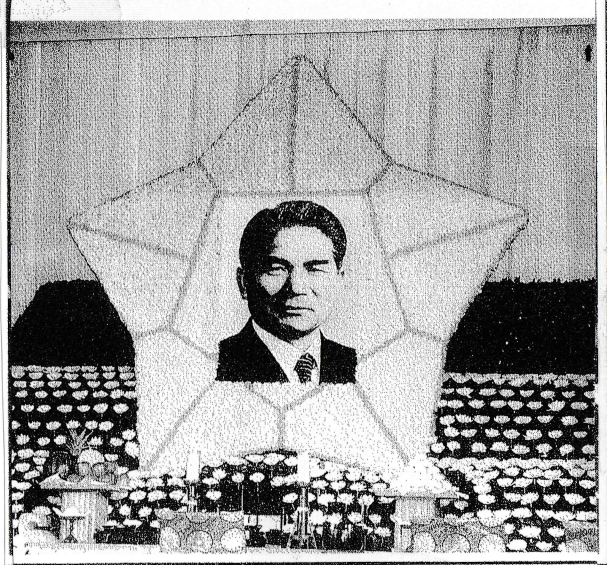
ともあれその後も幼稚園、小学校、中学校と学園は順調に伸び続けてまいりました。それは又、現幼稚園美馬睦美副園長との文字通り手をたずさえての道程でもございました。殊に幼稚園、小学校における副園長の尽力は並々ならぬものがございました。勿論多くの方々にもご助力を頂きました。教職員、保護者、お子たち、学園長は縁ある人々にあらゆる物事に毎日毎日感謝ばかり致しております。中学校に続いて学園長の長年の悲願でもあった高校の設立と、学園は成長し続けました。

そうした中でいつまで経っても暇さえあれば、一輪車に土を山盛りにした学園長が運動場を横切つて行く姿が見られました。

全ては土台作りが一番大切なことを学園長は身をもって教えてくれました。運動場を埋め立てるにあたり僅かなものでも不浄なものは、一切うずめることを許しませんでした。土は全てさぬきのまき土でした。ペース作りの大事さは教育も又同様でございます。基礎において誤れば先々取り返しがつかぬことになってしまうのは、今日の社会、状況をごらんになれば明らかです。

学園長の言動は常に分りやすくそれでいて他を強く影響せずにはおきませんでした。教師も生徒も直接間接に多くの影響を受けました。建学理念を根底におく私学教育の大切さは、学園に集う人々の全てによく浸透していると思えます。何にも増して、子供たちにまづ愛情を持つて接することの大切さは、先生方にはよくわかつて頂いているはずなのです。

今後、生光学園に於いてはますます学園長の意志を



継ぐものが増え続けること
でございましょう。理事長はその経営理念の体現者として早くより独自の方法を加えながら国際的なスケールでもって我々を先導してくれる筈です。土成町のみならず、オーストラリア研修センターに続いてのハワイ研修センターの完成も、もう真近です。

私学にとつて厳しい時代になればなるほど理事長の経営戦略はますますその牙えを見せてくれるに相違ありません。

学園長が一人でもつて実践されてきた私学の経営と教育面での運営を丁度、理事長と分け合う形で、教育理念は不肖校長である私を通して、各部門にお伝えし今後一層の理解を得て行くつもりです。

既に幼、小、中、高と各部門の部長は、それぞれが理事長、校長と心を一にしながから一部門を率いる指導者として人格指導力共に、既にゆるぎないものを育てつつあります。おそらくこの学校よりもバラエティに富むであろう教職員も又然りです。他に例を見ぬであろう施設部の役割は、又そのまま学園長の願いを共有し続け、学園を美しく、平和に保つてくれることのでございましょう。事務局におきましても、長の歳月を学園長と共に歩んで来て下

さつた人々を要して誠にありがたかつたのもしい限りです。更には給食、そしてインターナショナルコース、つまりはバイリンガルコースという全国初の画期的なコースの誕生に力を尽してくれた国際対策室。何にも増して学園長が常に大切に大切にしてきた子供たち。学園に関わる全ての人々こそが学園長の残して下さった大きな財産に相違ありません。

皆学園がそれぞれに好きであり、学園長が大好きであつた人々でもあります。今日のこの学園葬を行うにあたって準備の段階で申し合わせたように皆が皆思わず……

「ああ、この立派な飾り付けを学園長に見せてあげたかった——」と、一様に口にしていたのは一体どういうことでもございましょう。本当に全員が心を一つにしてこの日を迎えることができました。

学園長これだけいかがでしょう。どうですか、きれいでしょ、いいでしょう。そして、どうぞご安心下さい。皆、力を合わせて学園のため子供たちの教育のため一生懸命務めてまいります。どうぞ今こそやすらかにごゆつくりと本当の眠りを、お眠り下さい。おやすみなさい、お父さん。

—当日の弔辞より

4月27日 学園創設者 美馬昇 前学園長の命日です。

学園ができて74年！ 中学校ができて48年！

そして 美馬昇先生がお亡くなりになられて25年がすぎました。 「合掌」